



Title	L. A. ムラトーリの『イタリア年代記(Annali d' Italia)』に関するノート その3 : 中世
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学学報. 1986, 72(3), p. 65-83
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81129
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「研究ノート」

L.A. ムラトーリの『イタリア年代記 (Annali d'Italia)』

に関するノート

その3 — 中世 —

米山喜晟

Le note sugli “Annali d'Italia” di L.A. Muratori (3)

Yoshiaki Yoneyama

Nota.IV Dell'età e dei monarchi dei longobardi

L'importanza eccezionale di questa parte nell'opera. Le cinque zone principali degli avvenimenti scritti in questa parte. L'autore sottolinea la posizione dipendente del papato di quest'età dall'Impero bizantino. Il tentativo fallito del papa Martino I e la sua tragedia. Due ostacoli nel scrivere la storia di quest'età; troppa mancanza dei dati e troppa falsificazione dei dati della parte della Chiesa contro i longobardi. La eccezionale importanza della 'Historia Longobardorum' di Paolo Diacono. Il movimento iniziale dei longobardi. Muratori non crede la leggenda del tradimento del generale Narsete. L'instabilità dei monarchi e dei duchi. Un esempio dell'elezione di un duca. La mentalità militante e bellicosa di questa tribù e il loro senso dell'onore. Le loro superstizioni e i loro costumi. Delle loro leggi. Dei loro re; Alboino, Clefo, Autari, Agilolfo, Adaloaldo, Arioaldo, Rotari, Rodoaldo, Ariberto I, Bertarido, Godeberto, Grimoaldo, Bertarido (seconda volta), Cuniberto, Liutberto, Ragimberto, Ariberto II, Ansprando, Liutprando, Ildebrando, Rachis, Astolfo, Desiderio. La difesa e gli elogi del governo longobardo di Muratori.

ノート 4 ロンゴバルド族の時代とその君主に関するムラトーリの叙述について

本ノートは『イタリア年代記』中のロンゴバルド族支配の時代について論じる。Ricciardi社刊の縮刷本では、15項目34ページ（全480ページ中の7.08%）を占め、^①ムラトーリ（以下M.と略）が205年に及んだと計算したその期間の長さにと比べると、やや叙述が稀薄であるようにも感じられるが、それは後に見る通り極度の資料不足の結果であって、本書中においてこの部分が占めている重

要度はむしろその逆に高いといえそうである。たとえば本作品全体に対して消極的な評価を下している Bertelli も、「ロンゴバルド族の時代を例外とすれば、この M. の歴史は導きの糸、つまり一個の統一ヴィジョンを欠いている」^② などということばで、この時代に関する叙述を例外視し、また比較的くわしいコメントを加えている。さらに、M. の主に *Antiquitates Medii Aevi* に含まれたこの時代に関する研究成果は、約二世紀半経過した今日でも研究書の中でそのまま引用されることがあり、^③ いわばこの時代に関する M. の知識は、その後の歴史研究によっても完全には越えられてはいないらしい、という点も重要である。因みに M. が挙げたロンゴバルド族の王たちと、現代の定説を紹介していると思われる森田鉄郎他著『イタリア史』附録の統知者一覧表^④ とを比較すると、名前の綴りや就位年代などに時折わずかなずれは認められるものの、名前、第一人者として統治した順序、統治期間の大小等はほぼ一致しているといえ、Paolo Diacono に依拠^⑤ して構成された M. のロンゴバルド族支配の時代像は、今日のこれの基盤となっていることが推察しうるのである。

ロンゴバルド族とその時代については、すでに森田鉄郎氏によって、主要な参考文献や研究動向などについてのすぐれた紹介^⑥ がなされており、研究の手掛りは与えられているのであるが、もし私の無知による誤解でなければ、いわば研究以前の基礎的な知識、イタリア人なら誰でも知っている常識ごときのもので、たとえばフランク族等に比して著しく未紹介であるように思われる。そこで私は本論において、M. が行ったロンゴバルド族一般およびその君主についての記述とコメントを取り上げて、その方面の欠落を埋める一助としながら、同時に M. の『年代記』の叙述の特質を明らかにしておきたい。

ところで、M. のこの時代の叙述は、Ⅰ. ロンゴバルド族の領地の他に、Ⅱ. イタリアにおける東ローマ帝国領 (M. はローマ自体一貫してその一部だったと考える)、Ⅲ. その本国である東ローマ帝国特にその首都コンスタンチノーブル、Ⅳ. (地理的にはかなりⅡと重複するが) 法王庁と主要な教会および修道院、Ⅴ. フランク族および周辺の蛮族の領地等での事件を網羅的にトレースしており、特にⅢ. に関する叙述が尚も詳細で、しばしば量的にはⅠ. に関するものを越えている。またⅠ, Ⅱ. いずれもの都市に関しても (特にヴェネツィア、ラヴェンナなど) 興味深い叙述が見られるが、紙数の都合でいずれも省かざるをえない。ただ忘れてはならないことは、以上の諸要素がバラバラに存在するのではなくて、密接に絡み合っているということで、たとえばコンスタンチノーブルの皇帝たちが支援した単性論や聖像禁止令が、直ちにローマの法王庁に影響し、さらにはロンゴバルド族の動きや勢力にもその結果が反映したのであり、またⅤ. の周辺の蛮族の動きは、直接住民の生命や財産を左右したのであり、それだけ M. の叙述には必然性があったのである。

上述のような巾広い諸分野の事件を網羅していく以上、その叙述は断片的で一見取りとめもないものにすらなる。だが Bertelli が「泥川の水が流れるように年々が相次ぎ」^⑦ と評したその叙述からも、M. が強調しようとしたことは矢張り伝わるのであって、この時代における最も重要なテーマの一つは、東ローマ帝国と法王庁との関係、さらにつきつめていうと、法王庁の東ローマ帝国に対する従属的な立場であると思われる。たとえば604年の項^⑧ (本書の完本がほとんど存在しないわが国

において巻数とページ数を一々明記しても余り役に立たないし、また注のために紙数を要し過ぎるので、本稿においては、引用した箇所を含む年度の数を書き記すことで注に代える)で、M. は聖 Gregorio I に、「不滅の記憶に包まれた比類なき法王 (中略)、その知恵や賢明さやカトリック教への熱意を考慮し、その学識と雄弁と習性としての敬虔さとを振り返ると、我々の讃辞を越えていて大法王という称号は誰の目にも正当 (604年)」という最高の讃辞を呈しているのであるが、その法王が590年の Pelagio II 没後「満場一致」で次期法王に選出された際に、「彼はこの重荷と名誉から逃れようとして、秘かに皇帝 Maurizio の所に手紙を送り、ありったけの理由を挙げて、その選挙結果を承認しないでほしいと依頼した」という事実を記し、さらに「ローマの聖職者、元老院、人民が勝手に法王を選出するという越権行為 (abuso) は普通に通用していたのだが、法王は皇帝の同意と承認なしでは就任できなかったからである」というコメントを付け加えている。さらに単性論をめぐって皇帝との意見が合わず、法王権の独立志向が強まるとどういふ結果が生じるかは、Martino I の運命によって示される。649年法王就任の際「ローマの聖職者階級がその就位式を行うのに皇帝の同意を待とうとはしなかったために、時がたつにつれてギリシャ人が〈異例かつ不法に法王を僭称せし者〉と主張し始めた」ことを自らの第15書簡で記したというこの法王は、同年就任早々ラテラーノで公会議を開き、満場一致で単性論者たちの説や皇帝 Eraclio や Costante らの勅書の誤りを「有罪と宣告」した結果、時の皇帝通称 Costante の憎悪を受けて、653年には新しく赴任した総督 Giovanni Calliopa に病臥中を捕えられ、法王罷免の宣告の後に船でコンスタンチノープルに連行されて、国事犯として死刑の申し渡しを受け、「裸のまま、鉄の首輪をつけて」都を引き回されたという。「彼は穏やかな顔でこれほどまでの侮辱に耐え、これを見た市民の大部分は、こうした不当な光景に泣きかつ呻いた (654年)」と M. は記す。それまで常に単性論を皇帝に吹きこんで、法王迫害をけしかけていたコンスタンチノープル大主教の Paolo も、たまたま病床でその侮辱を耳にした時、さすがにそれはやりすぎたと嘆き、それ以上続けないように皇帝に懇願して間もなく死んだとされている。法王はその後クリミヤに運ばれて、翌655年の秋に没しているが、ここで重要なことは、この Martino I がまだ存命中に次の法王 Eugenio が選出されている (ローマ市民が Martino に同情してミサを妨害したと伝えられる) という事実で、やはり皇帝の罷免が効力を発揮したことを認めざるを得ない。

Martino I の例は極端だったとしても、この時代に M. が伝えている法王庁および教会関係の事件は、後世の教会人たちが主張する程には当時の法王権や教会の権威が高くはなかったことを示す。たとえば681年の項には、「ゴート王の時代から、新しく選出された法王は、叙任される前に王や皇帝に一定のお金を支払うという悪習を採り入れたが、おそらくその金額は3000ソルドの金貨だった」とあり、さらにその悪習は同年に Costantino (Pogonato) 帝によって廃止されたが、法王就任に際して皇帝の同意と承認が必要な点は不変だったと付け加えられている。また聖像禁止令をめぐる紛争の後 (738年)、ギリシャ人 Teofane は、法王 Gregorio II がローマとイタリアのみならず両方のギリシャ領を皇帝の服従下から解放したと記したのに対して M. は反対し、そうした説に従う者は

「誤っている」として、「法王は教会の主張と自分の生命を守るだけで十分で、蜂起した人民が別の皇帝を選出せぬよう抑えた」と明記している。またロンゴバルド族の時代が終ろうとし、フランク族の支配が確立しつつあった772年の項にすら、法王 Adriano が皇帝 Leone あてに送った報告のことが記され、その文面から「当時法王はたしかにローマを支配していたが、しかしギリシャの皇帝の主権に依存してそれを行っていた」ことが分るといふコメントが付けられている。おまけに当時の法王証書中に、皇帝を「神によって冠を与えられた」形容句がつけられて、帝権神受説がみとめられている箇所すらあるとされている。以上に挙げてまた M. の記述において一貫しているのは、この時代の法王権が、世俗的な領域では東ローマ帝国の皇帝権に従属していたという主張に他ならない。これは M. が30余年以前に加わったコマッキオの領有権をめぐる論争^⑨における、かつての立場の延長上にあることは明らかである。事実彼は、フェルラーラ司教区の誕生 (661年) とか、Astolfo 王による、本来はロンゴバルド族の領地だったコマッキオの法王への引渡し (755年) 等といった、同論争と密接な関係のある史実にも、まさにこの時期に関連して触れているのである。この論争については将来詳細に論じる予定であるが、単に法王庁相手の領地争いに止まらず、ともすれば歴史から超越した絶対的な存在として振舞いたがる法王権を、歴史的な存在として把握し直そうとする、M. の終生のテーマの一つの出発点であったことが、本書の叙述によっても知りうるのである。

ところで M. がこの時代、とりわけロンゴバルド族について叙述しようとした時、それを妨げた障害が主に二つあり、その一つは資料の欠如であり、他の一つは、主に教会関係者による資料の捏造であった。前者はロンゴバルド族侵入の前夜ともいべき556年の項の冒頭に早くも、「イタリア史がここで光を失い始めた」という悲鳴に近いことばが現われ、以後繰返し (587, 597, 642年) 同種の悲鳴を聞くことができる。なお M. はその理由を次のように説明する。「ロンゴバルド族の到来によってイタリアにもたらされた不幸の内、人々の間にひどい無知がもたらされ、文字の学習が廃されてしまったことは、決して小さいものではない。その理由は、この蛮族が武力のみを評価する一方、イタリア人たちが相次ぐ戦乱の騒ぎと災難に追われて、とても学問などに打ち込む気にはなれず、おまけに良き教師が払底していたことにある。そのためこのころは誰一人として彼らの時代の歴史の記述に取り組まず、またたとえ何人かの歴史家がいたとしても、彼らの労苦は失われてしまった (587年)。」こうした状況のため、ロンゴバルド族出身の貴族で、自族の滅亡を目のあたりにした後、Carlomagno の官廷にも出入りし、晩年にモンテカッシーノ修道院で『ロンゴバルド人の歴史 (Historia Longobardorum)』を著した Paolo Diacono (以下 P.D. と略) の存在はいかに貴重であったかは、容易に想像しうる筈である。M. はその作品中に多くの空白が見られ、またポワチエの戦いでは回教徒側の死者35万7千に対し、キリスト教徒側の死者をわずか1500にするなどという (732年、また670年や676年の項に同様の例あり) 「小説風の大きさな表現 (670年)」が記されていることを批判しつつも、基本的には一貫してその記述に好意的で、特にロンゴバルド族の名家の出身という有利な立場に加えて、「わずか百年後にこの事件を記した (670年)」などということば

で表現した P.D. の年代の近さを重視し、彼の著作に特別な注意を払い、叙述の基礎としている。それに対し、主に教会関係者によって行われた資料の捏造については、はるかに厳しい態度を示す。たとえば750年の項でルッカの英国貴族の墓碑銘について記した際に、それが後年の偽作で、被葬者が王ではなかったのに王という称号が付されたことに関して、「野蛮時代の人々は、彼らの事柄をこのように大げさにした。それは無知のためか、利害のためか、あるいは栄光を熱望したため」と三つの動機を挙げており、特に教会関係者を動かした後の二つの動機を重視し非難する。教会全体にそうしたやり方を黙認し、奨励する傾向さえあったのだが、M. はコマッキオ論争以来そうした教会の病弊に対して戦い続けていたのであり、その厳しい態度は当然であったといえる。

さて問題のロンゴバルド族であるが、その出身地はスカンジナビア半島で、ゴート族と元は同族だったらしいということはすでに記した。^⑩しかし早くから Tacito らの古代の著者によって、あるいはイタリア侵入時代の作者によってロンゴバルドと呼ばれて来た (563年)。^⑪だが彼らが動き始めた時期は比較的遅くて、ようやく527年 Arduino (?)^⑫王の下で Pannonia (今日のハンガリー) 入りしたとされ、551年、当時 Dacia (ルーマニア) を占領していたジェピディ族に攻撃されていたが、Giustiziano I の助けを得てこれを破ったとされている。またその翌年 Narsete が大軍を編成して東ゴート族を討った時、ロンゴバルド族の精鋭2200もこの戦列に加わったという。しかし戦いが東ローマ帝国の大勝と Totila 王の死で終ると、「Narsete は率いて来たロンゴバルド族の追放にとりかかった。何故なら彼らは野蛮に家に放火し、聖堂に逃れている場合にさえ、女を辱しめたからで、この蛮族が帰路紛争を起さぬよう、Valeriano と甥の Damiano の率いる一隊を同行させ、贈り物を持たせて祖国つまり Pannonia すなわちハンガリーに送り返した。」こうした蛮行の他に、同族の評判を悪くしたのは、彼らがアリウス派の信仰を奉じていたことで、563年の項に、Treveri の司教 Nicezio が Alboino 王の妃で、カトリックのフランク族の出身の Clotsuinda によって、「その世紀の初めに、王妃の祖父にあたるフランク族の王 Clodoveo が、聖 Clotilde 妃のすすめでそうしたように、彼女の夫がアリウス派の信仰をすてて、カトリック信仰を奉じるよう説得してもらうために」書簡を送ったが、王妃がその後間もなく死んだこともあって、実現しなかったとある。566年の項で、その Alboino 王がアヴァーリ族と同盟してジェピディ族を滅ぼし、その王 Cunimondo を殺したことや、当時すでに王妃を失っていたので、Cunimondo の娘 Rosmonda を娶ったと記されていて、いよいよイタリア侵入の準備が整いつつあったことが分る。同族のイタリア侵入に関しては、皇后 Sofia のざん言によって、皇帝 Giustino II が Narsete 将軍を罷免し、コンスタンチノープルに帰還を命じたため、憤慨した将軍が、ロンゴバルド族に使いを送ってイタリアに招いた結果だとする P.D. らの説が紹介され、それに対する Corippo の反論と、Pagi 神父の Corippo 説の批判などが示された後、Narsete の憤慨は事実だとしても、使者を送ってロンゴバルドを招く等といった行為には至っていないだろうとする Anastasio の意見が示され、すでにイタリアに来たこともあり、わざわざ招かれなくとも同族には十分やって来る動機があったことが述べられている (577年)。このあたりの判断は妥当で、極めて説得的であるように感じられる。

この民族の王については後に具体的に眺めるが、その地位も権力も極めて不安定なもので、現実の統治は、むしろ各地の公 (duca) によって、かなり恣意的に行われたのではないと思われる。侵入早々、Clefo 王の暗殺後約10年に及ぶ空位期間が出現した際「P.D. によって我々は、この約10年の間、同族が36人の公によって治められたのを知る。彼らはこんなに多数で協調しつつ統制を取りながら一個の共和国を形成していたが、各自が君主として自分に割り当てられた都市を、他人から独立して統治していた (575年)」と記されている。たとえ王が存在しても、後に見るような不安定さでは、こうした割拠的狀況が解消したとはとても考えられないし、数え切れない程頻繁な公の反逆が、そうした地方権力を推定させるからである。ところが実は公の権力そのものも、それ程安定したものではなかったらしく、たとえば「ベネヴェント公 Arigiso は、死ぬ前に、かつてのフリウーリ公 Gisolfo の息子で自分の許に逃れて来ていた Radoaldo と Grimoaldo を、自分の息子以上に統治に適した者として人民に推薦した。これは、これら公の選出が人民に依存していて、その承認がロンゴバルド族の王に属していたことの表われである (641年)」と記されている。必ずしもこの M. のコメント通りであるかどうかは疑問の余地があるが、公の場合にも、その人物に問題がある時には人民の間から抗議を唱えることが可能であったと見なすことができるであろう。いずれにしても、一応原則となっているらしい世襲制を、必要に応じて比較的簡単に放棄して、露骨な実力 (その尺度は場合によって変化する) 主義に切り替えていたようであるが、そのためにかえてこの民族は政治的安定や団結を得難かったようである。

この民族が文字を好まなかったことはすでに見たが、それでは何を重んじたかについて、M. は次のように記す。「勇敢で名誉を重んじることで特に際立っていたロンゴバルド族において、一人の男性に対して言いうる最大の侮辱は、怠け者とか臆病者とかつまらぬ奴を意味するこの *agra* ということばであった。Rotari 王の法の384条で見る通り、誰かにこう言った人間は処罰され、彼はそれを取消して罰金を払わなければならなかった (706年)。」要するに尚武の民であった。

彼らはアリウス派ではあったが、決して不信心ではなく、その民族の守護聖人として、洗礼者聖 Giovanni を熱心に崇拜し、モンザの聖 Giovanni を祭った教会が大事にされている間は、この民族は無事だったという伝説も残されていて、P.D. は自族の没落後、その教会の荒廃を自分の目で確かめたと証言している (663年)。とはいうものの、永年僻遠の地で固有の異教に親しんで来たこの民族が、そう簡単に古来の崇拜を棄てる筈はなかった。その点について、Ughelli の *Italia Sacra* 中に収められたベネヴェント司教聖 Barbato 伝の一節を引用しつつ、M. は興味深いエピソードを伝えている。「ベネヴェントのロンゴバルド人たちは、キリストの教えに従うと声明して、洗礼を受けはしたが、ちょうどフランク族も長い間そうしていたように、ずっと異教徒の信仰を保持し続けた。つまり各自自宅でその像を祭っていた蝮への崇拜を守り続けた。また彼らの間には、木を神聖なものに見なす迷信が残っていて、それに犠牲や供物を捧げてきたようである。彼らはまたその枝に一片の皮を貼りつけ、手綱を放したまま馬で駆けて行き、振り向きざま、矢をその木に射かけ、その小片を切り放すことができた人は幸せだった。彼は大変敬虔にそれを食べるのだった。Barbato は

まだ司教になる前から何度もこの迷信に反対して論じていたが、いくら説教しても無駄だった。やがて（皇帝 Costante が渡伊しその軍隊の）ベネヴェント包囲が始まった。すると聖 Barbato はかつてなくこの問題に熱中したので、Romoaldo 公は、もし神がその危険から市を守り給うならば、聖木を引き抜こうと約束した。そのことについて、Barbato が証人となった。そこで包囲が解けるや否や、この神の僕は、斧をつかむなり、その冒瀆的な木を根元から切り倒すために駆けて行き、その場所を土で埋めてしまった（663年）。」あるいは、Liutprando の法にふれた部分でも、「すでにアリウス派信仰を誓絶して、カトリック信仰を信奉していたけれど（と M. は記す）、古い異教の迷信を信じている人は絶えなかった。彼らは予言者や、腸卜占師に頼り、聖木とよばれる木を祭っていて供物を捧げ、また泉を崇拜することもあった。カトリックの Liutprando 王は、そうした迷信を厳罰で禁じ、すべての占い師や魔術師を追放して、そうした誤りを一掃するために、監視する裁判官を任命した（724年）」とあり、異教信仰の根強さを推測させる。

M. はこの民族の古来の風俗のことを次のように記している。「この王妃（Teodolinda）は洗礼者聖 Giovanni の教会をモンザに建てさせた上に、宮殿も建てさせて、その中にロンゴバルド族の功業のいくつかを描くよう注文した。P.D. は彼が生きていた時代に、その絵を眺めて、そこから昔のロンゴバルド族の容姿や服装の形状を観察した。すなわち彼らは頭の後側を剃っており、残りの頭髮は額の上で分け、丁度口のあたりまで顔の両側に垂らしていた。Paolo は、彼らの髭については何も語っていないが、うんと長く伸ばしていたと信じるべきである。というのは、彼は彼らが長い髭のためにロンゴバルドという名を得たとしているからである。また彼らは、当時アングロ・サクソン民族もそうしていたように大抵は亜麻布でできたゆったりとした服を着ていて、その服を、様々な色のついた帯や巾広い布で飾っていた。彼らの靴は、上部は指の先端まで開いていて、皮の紐でそれを足にぐるぐる巻きつけていた。また前述の歴史家は、その後彼らが皮の長靴をはくようになり、また騎乗する時には、その長靴の上にさらに赤っぽい色の織物や布でできた半長靴やショートブーツなどをはいたと付言する。彼らはそうしたことをイタリア人から学んだのだ（603年）。」

高名な Rotari や Liutprando らの立法についても、簡単にはあるが、触れていて、たとえば Rotari のそれについては、「この時期（643年）まで、ロンゴバルド人の王国は、成文化された法では治められていなかった。ということは、法というよりも、むしろ慣例や習慣で治められて来たことを意味する。今や、好戦的であると同時に、正義を愛好する君主でもあった Rotari 王は、強者たちが弱者たちに加えている圧迫を見て取ると、王国の貴族たちや判事たちや軍隊の助言の下に、その余分な所を除き、不正な箇所を正し、不足分を補いつつ、ロンゴバルド族の法を一体化しようと決心した。こうして出来上がった法律の集大成に『勅令（Editto）』という名をつけ、その時以降、ロンゴバルド族はこの法典を用いることになった。」なお M. はその法典が、フランク、アラマンニ、バヴァリア諸族の法をまとめて法典を作ったフランク王 Dagoberto の影響で生れたことを、同じ箇所でも認めている。724年の項には、すでにその一部を見た、Liutprando 王による102条の追加について述べられているが、「公証人は、ローマ法に従うと声明している人のためにはローマ法に従って

契約を作製し、(またロンゴバルド民族の人々の場合には)彼らが従うロンゴバルド法で契約を作製したことが、それらの法から明らかになる」とされている。なおロンゴバルド法の問題点である神明裁判の一形式である決闘による裁判について、M. ははなはだ歯切れの悪いコメントを加えていることが注目される。「第65条において、王はたしかに決闘という愚行を知っていると宣言する。ただし是認しているわけではない。何故なら、軽率にもそれによって、人間の気まぐれから、神に真実を公表するように強制しようとする行為だからである。それにもかかわらず、王はその誤った行為を大目に見て、許している。何故なら、それがフランク族や他の北方の民族と同様、ロンゴバルド族においてもその習慣の中にしっかりと根付いていたので、あえてそれを禁止することはできなかったからだ (724年)。」

一般論はこのあたりで切り上げて、ロンゴバルド族の君主たちについて具体的に眺めることにする。だが総数20人余に上るので、特にその地位の不安定さと運命の浮沈に注意したい。

(1) Alboino 王 M. はこの王のパヴィーア入城を次のように描く。「そこで我々は上述の Paolo より、パヴィーアが長期の粘り強い籠城の後に、食糧が欠乏したため Alboino に門を開いたことを知る。彼が聖 Giovanni 教会の東側の門から入城しようとする時、王の乗馬が倒れて、いくら拍車をかけても、馬丁が鞭で叩いても、起き上がろうとはしなかった。その時彼の士官の一人で、神を畏れている男が王に言った。〈ああ陛下よ、あなたがなされたあの誓いを思い出して下さい。あの誓いを取消して下さい。そうすれば町に入れます。この哀れな民はキリスト教徒です。〉以前 Alboino 王が腹立ちまぎれに行った誓いとは、パヴィーア人が長い間降参しないために、剣で同市民を皆殺しにしてやると誓ったことだった。王は誰にも自分を止められないことを十分承知していたけれども、その誓いを取消した。すると忽ち乗馬は自分で立上がり、王は入城し、誰にも害を加えることなく、Teoderico 王が建てておいた宮殿に赴いて宿営した。人心地のついた市民たちは、皆彼に感謝して、自分たちの主君として歓迎するために集まって来た。蛮族とはいえ、ここでも王の寛大さは注目に値する (571年)。」A. 王の死は余りにも有名だ。「この王が戦いに勝ってヴェローナに滞在していた時、ある日士官のために盛大な宴会を催した。彼は戦場で自分の手で殺したジェピディ族の王 Cunimondo の頭蓋骨に黄金を象眼させており、その容器を用いて酒を飲んだ。野蛮な趣味の悪い思いつきだが、P.D. もこれについて証言しており、彼自身、その実物を Rachis 王に見せてもらったことがあると誓う。ブドウ酒で上機嫌になった野蛮な王は、妻の Rosmonda に亡き父のお相伴ができるよう、その無気味な茶碗で楽しく一杯やれと、乱暴にすすめた。彼女は (中略) 他ならぬこの Cunimondo の娘であった。このことは哀れな王妃の胸にひどくこたえて、このことで怨みを抱いた彼女は復讐に取りかかった (573年)。」王妃は A. 王の乳兄弟で自分の恋人である Elgimiso のすすめで、大力の Perideo の恋人に化けて P. と関係し、P. をおどして A. 王を暗殺させた。その後 E. を王に推挙するが、人民の同意が得られず、ロンゴバルドの宝を持ち E. とラヴェンナ総督領に逃亡する。総督 Longino に求婚された R. は E. が邪魔になり、これに毒を飲ませると、E. は途中で毒と悟って R. を刺し殺してしまう。一見 A. は粗暴な暴君のようだが、M. は「彼の死が伝えられると、同族

の人々から広く愛され尊敬されていた、かくも戦さを好んだ君主を失ったと知って、ロンゴバルド族の嘆きや涙は果てしなく続いた（573年）」と伝えている。

(2) Clefo 王 「おそらく八月には、ロンゴバルド族の主だった首領たちがパヴィーアに集まり、仲間の内で最も高貴な一人 Clefo または Clefone を王として選んだ。(中略) P.D. が短かく記した残酷さを別にすると、その他の活動については何一つ我々の許にはとどいていない (573年)。」 「彼はある小姓または家来によって殺されたが、この王殺しの理由ややり方については、何一つ我々には伝わっていない (575年)。」その後約十年の空白があって、36人の duca (公) らが治めた。

(3) Autari 王 「P.D. はロンゴバルド族が10年間王なしで、公たちの支配下にあった後、ついに Clefo 王の息子 Autari を王に選んだ (584年)。」588年の項に、フランク王 Childeberto は、東ローマ皇帝 Maurizio にロンゴバルド族を追い払う用意があると伝え、「その後その目的のために強力な軍隊をイタリアに送り込んだが、大胆な A. 王はそれほどの大きな嵐にも少しも驚かず、その兵力をまとめると、フランク—アラマンニ連合軍を迎え討った。そして他には同様の記録がみられないほど多数のフランク人を殺した。捕虜も多数にのぼり、他の者はやっと祖国にたどりついた」とある。この大勝で名を高めた A. 王は、やはりフランクと不和になっていたバヴァリア公 Garibaldo (P.D. らは王とするが、M. は公だとする) の娘 Teodolinda に求婚、G. 公が同意する。「この返事を受け取ると、王は自分の目で花嫁を見たいと望み、新しく使節をその地に送る機会を捉えて、自分も使節団の一人に扮し、変装して彼らと同行した。使節団長は老人だったが、一行と共に G. 公の拝謁を許されると、主君からの伝言をしかるべく言上した。その後、身分を秘した A. が進み出ると、自分は主君からすでに噂で名高い T. 姫の美しい器量を自分の目で見て報告せよという特命を負わされていると申出た。そこで G. は娘を呼んで来させ、A. は頭の天辺から足の先まで彼女を眺め、大いに気に入り、このような花嫁を持つことにロンゴバルド王は必ず満足し、人民もそんな王妃に満足するだろうと述べた (589年)。」そのあと使節に扮した A. が王女の手に触れたので、姫の乳母がその正体を悟る等のエピソードが続くが、こうしてこの民族のカトリック化の推進役となった Teodolinda 姫が登場する。なおその後バヴァリアでは何らかの政変が生じ、T. の兄弟 Gundualdo もイタリアに逃れて来ている。A. 王はさらに勢力をのぼし、遂にカラブリアのレッジョまで行って海上に柱を見、剣の先でそれに触れ、自族の国境がここまで達したと言ったという P.D. の記述 (589年) を紹介した後、M. はそれは伝説にすぎないとして、レッジョは当時ナポリやその周辺と同様、皇帝領だったと推定している。590年には、再びフランクの公たちが東ローマの総督と連携するためイタリアに侵入したが、東ローマ軍が間に合わなかったため、略奪して帰国したとされており、M. は、ロンゴバルドの危機だったとコメントする。A. 王はブルゴーニュ王 Guntranno にフランク王 Chiliberto への仲介を依頼、その交渉が順調に進んでいた時、すなわち590年9月5日、突然没した。「毒殺されたという噂も流れたが」、ロンゴバルドの子供がカトリックの洗礼を受けることを禁じたための天罰説もあった。

(4) Agilolfo 王 「Teodolinda 王妃の資質や美徳は稀有のものだったに違いない。というのは、バ

ヴァリア族であったにもかかわらず、ロンゴバルドの最有力者たちは、彼女を女主人として尊敬し従っただけではなく、自分たちの王国を治めるのにふさわしい新しい夫を選ぶことを許したからだ(590年)。」かくして王の選出権を得た T. は「そこで最も賢明な人々の助言に従い、戦争が好きな君主で、亡き A. 王の親戚に当たり、顔立ちがよくて、人民を立派に統治するために極めて適した精神を持ったトリノ公 Agilolfo に目をつけた(590年)。」T. は Ag. をパヴィーアの近くまで招き、「飲み物を運ばせ、コップの半ばまで自分が飲むと、のこりを Ag. に差し出し」、選択の結果を知らせ、11月には盛大に結婚式が催された。この Ag. に関しては、前王 A. の結婚式の際に近くの木に落雷があった時、異教の占い師が、花嫁はやがてトリノ公の妻になると予言したため、Ag. があわてて口外したら首を切ると脅したという伝説(589年)を P.D. が伝えており、この時代の人々のメンタリティがうかがわれる。Ag. 王の初仕事は、侵入したフランク族が連行したイタリア人の釈放で、買い戻すための資金作りに奔走した。ベルガモ公 Gaidolfo は二度そむいて二度許されているなど(591年)、諸公の活動も盛んで、東ローマ領をめぐる紛争も絶えない。M. は一貫して Ag. 王に好意的で、総督 Romano に対して批判的である。597年に総督が更迭され、599年には後任の Calinico 総督と Ag. 王の和平がむすばれ、Gregorio 大法王を喜ばせた。602年 Ag. 王と T. 妃の間に王子 Adaloaldo が誕生、「敬虔な王妃 T. は、夫から Adaloaldo と名付けられた息子がカトリック信仰に基づいて洗礼を受ける許しを得た」とあるように、Ad. はカトリック教徒として育てられた。法王 Gregorio I は喜んで、王妃に贈り物を沢山送った。その目録が今も残っているという。また T. 王妃のモンザの宮殿の三つの冠(特に鉄冠)は有名である。612年の項ではアヴァーリ族が侵入して、フリウーリ公が戦死したとされるが、後の Grimoaldo 王の父であった。この時あの P.D. の先祖も奴隷にされたという。Ag. 王の没年に関しては論争があるが、M. は615年説を取る。M. はこの王を「平和への愛を戦争へのそれに優先させ、特にカトリック信仰をロンゴバルド王の内で最初に奉じ、そのことが、同族全体をアリウス派の誤りから救うのに少なからず貢献した、偉大な勇気と大いなる知恵に恵まれた君主(615年)」だと礼讃する。また王の在世中に、従来フランク族に対して貢納していた習慣を、交渉の末一度の献金と永久的な和平条約とで打切ったとされる。

(5) Adaloaldo 王 625年の項に、「このころまで、Ad. 王は母 T. 前王妃の助けによって平和にロンゴバルド王国を治めた」と記されている。T. の正確な没年は不明だが、とに角「P.D. によると母と共に10年統治した後、(多分その死後)彼の頭が変になり発狂した」とされており、Fredegario は、王が皇帝の使い Eusebio の塗り薬を用いると、E. のあやつり人形になって次々とロンゴバルド人を殺したため失脚したという寄怪な説を伝えている。なお M. は毒の利用には多少の真理が含まれており、狂気説は偽りで、正当な政変ではなかったらしいとする。

(6) Arioaldo 王 法王 Onorio I はカトリック王を失ったこの政変に当然反対だった。この王は、余りにもその人望が高かったため(4)の Ag. 王夫妻に殺されたと言われる Gundualdo (612年の項、M. は Ag. の人格から暗殺はありえぬと否定)の息子とされ、そのため Ar. が父の仇を討つていとも Ad. 王を殺したとする見方があるという。しかし M. は、「私にはこの Adaloaldo への陰謀を惹き起

こすのに、少なからずこの宗教の違いそのもの (Ar. はアリウス派を信奉) が影響したと疑えてならない。何故ならまだ大部分のロンゴバルド人たちはアリウスの誤った信仰に従っていて、母親からカトリックの教えというミルクを飲んで育った王を不信の目で見ていたからだ (625年)」とする。王位就任後間もなく、トルトーナの司教とボッピオ修道院長の間で紛争が生じて、この王が裁定を求められた時、問題がカトリック教会の管轄権に係わることなので、教会の判事に決定してもらうようにすすめて、裁定を断っている。M. は「ロンゴバルドのアリウス派の王とはこういうものだった。Baronio 枢機卿ですらこの賞讃すべき自制を称えずにはおれないだろう (627年)」と記す。ここでしばしばノヴェッラに用いられる、貞節な王妃がざん言に会って、牢にとじこめられるという伝説が現われる。すなわち629年の項で、「王妃 Gundeberga は、すでに述べた通り、Ag. 王と T. 妃の娘で、この歴史家 (Fredegario) によってとても美しい器量で、あらゆる人に対して優しく、しかもとりわけキリスト教徒、つまり私の信じる所ではアリウス派の夫と違ってカトリック教徒としての美德に恵まれていた」のだが、その宮廷に Adalolfo という王の信任の厚い家来がいて、少し王妃に容姿をほめられたために思上がり、王妃に言いよって、王妃からその軽率を叱られ、顔に唾をはきかけられる。Ad. は王に告げられることを恐れ、先手を打って王妃とフリウーリ公 Tasone の仲が怪しいと王にざん言、王はこれ信じ王妃を Lomello の城の塔にとじこめる。ただし632年の項に、フランク王 Clotario がその噂を聞き、G 王妃に同情、使者を送り、王妃の潔白をめぐって神明裁判を提案し、決闘を行った結果、Adalolfo は敗れて死に、王妃は元に復したとされている。なお Ar. 王のライヴァル Tasone は、635年の項でフリウーリ公に騙し討ちされたとされる。Ar. 王の没年については異説もあるが、M. は彼が12年治めたという P.D. の説を取って636年とする。

(7) Rotari 王 Fredegario はその選出についてこう書く。「Arialdo の寡婦となった王妃 Gundeberga は、彼女が選んだ人を王にするというロンゴバルド族の誓約を手中にすると、ブレッシャ公 Crotario (P.D. は Rotari と呼び、法典でもそう自称) を自分の許に呼んだ。こうして彼女は、その結婚が彼にロンゴバルド王の地位をもたらすはずだから、もし彼が今の妻と別れてくれるならば、自分と結婚しようと提案した。彼の同意を得るのには大いに論じる必要はなかった。同王妃はまた、Rotari が王妃であり妻である彼女の地位や名誉を害しないことを誓うように求め、彼はきちんと万事を約束した。その後間もなく、G. はこのR.こそ全ロンゴバルド族の王であると宣言した (636年)。」あまりカトリック教徒らしくない提案のようだが、新しい王は、「アリウス派の異端を奉じていて」また当時ロンゴバルド治下のあらゆる都市には、カトリック司教にアリウス派司教が併立していたとされる。Rotari は「すぐれた君主で、正義を愛した」が、「王位につくと (と Fredegario はいう)、彼の選出に反対したり、頑固に王として認めようとしないう族の貴族たちに対して怒りを爆発させ、多くの者を殺した。彼はこのきびしさと残酷さによって恐れられ、彼自身は平和を好んだにもかかわらず、ゆるんでいた軍規を立て直した。だがその手から王冠を受け取り、多くの誓いによって縛られていたのに、王妃 G. に対して示した忘恩ぶりはにくむべきものである。その理由は分らないが、おそらく信仰の違いがこうした不和を惹き起したのだろう。つまりその歴史家 (Fr.) は、

Rotari が私服を着せた彼女をバヴィーアの宮殿の一室にとじこめて、何人もの妾を蓄えていたとする (637年)。」こうして王妃がとじこめられてから5年目にして、フランク王 Clodoveo II の使者が来て王妃の釈放を要求し、王妃は王座に戻ったという、すでに632年の項で見た話と類似の出来事が、やはり同じ Fredegario によって記されているという。しかし私生活にはこのように不名誉な記録が残っている Rotari が、政治家としては、ロンゴバルド王中の一〜二を争う存在であり、彼の『勅令』についてはすでに記した。その没年に関しては、646年、647年等諸説があるが、M. は例の通り、P.D. の652年説に従い、その墓はモンザの聖 Giovanni 教会にあって、後年その墓が暴かれたという。

(8) Rodoaldo 王 Rotari の死後、その先妻の息子らしい Rodoaldo が王位を継いだ。この王が Ag. の娘 Gundeburga (すでに Arioaldo と Rotari の妻だったとされる) と結婚し、G. が姦通で告発され、Carello という人物が弁護に回り、決闘で告発者を殺し、王妃が無罪になるという神明裁判伝説が又もや、今度は他ならぬ P.D. によって伝えられている。勿論 M. はありえないことと一笑に付しているが、当時の記録の混乱ぶりと、王妃をめぐる裁判伝説が当時の人々にいかに好まれたかが分る。この王は暗愚で、その統治期間には問題の余地はあるが、「その死は激しかった。何故なら、乱暴した女の夫に殺されたからである (653年)」とされる。

(9) Ariberto 王 この王は、Teodolinda の兄弟 Gundoaldo の次男とされる。(6)の Arioaldo 王もやはり G. の息子とされ、Adaloaldo 王を倒して王位についた時、父の報復をしたとする説があったことはすでに記したが、その場合 Ariberto は彼の弟となる筈である。だが特にそうした記述はなく、(612年の項に Ariberto の兄は Gundeberto とされている)、それ所か M. は、「Rodoaldo の代りに、Gundoaldo つまり善き王妃 Teodolinda の兄弟の息子に当る Ariberto が王となった。こうしてロンゴバルド族の王の笏は、バヴァリア民族の手に移った (653年)」と特記している。この (6)の Arioaldo 王は、実は Gundoaldo の息子ではなかったか、あるいは別人の G. の子であったと見なすべきだろうか。「Ariberto 王は良きカトリック教徒であったから、ロンゴバルド人が彼を支配者に選ぶのに困難を感じていない以上、すでに大多数のロンゴバルド人がカトリック信仰を奉じていたことが、十分に信じうる (659年)」と推定されている。この王はカトリック教徒で、カトリックの同教や信者に対して迫害などはしておらず、だから殉教者など出るはずはなかったのに、教会は史実を歪めて殉教者をでっち上げていると、M. は抗議する。この王は在位9年目に没し、息子二人が領地を継ぐ。

(10) Bertarido 王と、(11) Godeberto 王 Ariberto I は、B. と G. という二人の息子を残したが、二人を共に嗣子にしたいと考えて、「王国を二つに分け、各々に与えた。G. はバヴィーアに居を構え、B. はミラノにそうした。(中略) 長子の B. には弟が自分と等しいことが不快だったに違いない。また火に油を注ぐ悪人も事欠かなかった。国境をめぐる口論が生じねばならなかった (661年)。」こうして兄弟の不和が昂じ、自軍を弱いと感じた G. 王は、662年にトリノ公 Garibaldo をベネヴェント公 Grimoaldo の許に送り、援軍を求めさせた。ところが使者は王を裏切って、ベネヴェント公に対して「王国は無経験で互いに憎み合っている二人の若い王で苦しんでいる」ので、「年令的に

も知恵分別においても老練で、戦いにも慣れたベネヴェント公こそ、王国を秩序正しく治めるのに適している」として、Grimoaldo に王位につくことをすすめた。野心家 G. はこのすすめが気に入り、息子 Romoaldo に領地を委ねて、パヴィーアに進軍する。Grimoaldo は先に Garibaldo を G. 王の許に送って、援軍に赴くと伝えさせた。Garibaldo は二重に裏切り王にベネヴェント公の魂胆を告げ、彼と会う時には武器を隠し持つようにすすめる。さらに、彼はベネヴェント公にも、王が彼を殺そうとしていると伝える。双方は相手の魂胆を承知の上で会うが、Gr. は「王と抱き合う時、相手が武器を隠し持っていることを悟り、そのことを口実にして、剣を抜いて刺し殺し」王位を奪った。G. 王の幼児 Ragimberto は、召使によって隠され無事育てられた。「ミラノ王 Bertarido は、弟の身に起ったことを知ると（中略）大急ぎで、王妃 Rodelinda と幼児 Cuniberto を後に残したまま逃走した。R. と C. は Gr. の手に落ちたが、ベネヴェントに送られた（662年）。」

(12) Grimoaldo 王 こうしてまさに主君をわが手で切り殺すことによって王位をつかんだ Gr. 王は、幼時から波乱万丈の運命を越えて来た。すなわち彼はフリウーリ公 Gisolfo の息子に生れたが、611年のアヴァーリ族の侵入の際、父は戦死、母は敵将 Cacano に恋して城門を開いたという伝説のヒロインであった。落城した後兄弟は馬で逃走した。Gr. は四人兄弟の末弟で、「兄弟の一人の馬の背に乗っていたが、まだ子供で一番小さかった。馬が走ると、しっかりつかまっていられなくて地面に落ちた。そこで長兄は後に残して蛮人の奴隷にするよりも殺したほうがましだと考えて、槍を手に取り突き刺そうとした。すると子供はしっかり馬につかまるから突き刺さないでおくれと泣き叫び始めた。そこで兄は手をのばして腕を取り、裸馬の尻にのせてやった。アヴァーリ族は子供たちが逃げるのを見て、追跡し始め、その中で最も早い男が Grimoaldo を取っつかまえた。しかし彼に手をかけなかった。それは相手が幼いためだけではなく、とても美しい顔立ちで、目が生き生きと輝き、金髪だったからだ。不幸な少年は、いやいやつかまえた相手に同行したが、自分の不幸を十分知っていて、うまく逃げ出す方法を考えており、その年の子供にしては過ぎた勇気を振りおこし、蛮人の横腹にぶら下っている短刀を引き抜くと、ありったけの力でその頭部に切りつけ、相手を地面に倒して殺した。それから Gr. は大喜びで馬にとび乗り、全速力で駆けて兄たちに追いつき、我が身に起ったことを話して、喜びを二倍にした。」父の所領が失われたので、この兄弟はベネヴェント公に仕え、先に見た通り、641年の主君 Arigiso の死の際、Gr. の兄 Romoaldo がベネヴェント公に推挙され、647年にはその兄が死んで弟の Gr. が後をつぐ。そして662年の項で、王位についているわけで、アヴァーリの侵入以来半世紀が過ぎていた。王位についてからも波乱は続き、東ローマ皇帝 Costante が、その翌年の663年にローマに来て、軍を率いて、Gr. の息子の治めるベネヴェント公領を荒らし回る。しかし皇帝軍は領地を占拠するまでには至らず、Gr. 王は翌年には公領をもと通り取り戻している。さらに665年には Bertarido 王の支援（B. 王は一時帰国したが再び逃走してパリの王 Clotario III の許に逃げ込んだいた）を口実に、フランク族の軍隊が侵入、Gr. 王はアステイで迎え撃ち、一度は逃げるふりをして食べ物や飲み物を残す。油断した敵が略奪にはげみ、分捕品で飲み食いした後、全員高いびきで寝ている夜中に反撃し、多数の敵を虐殺し、その地は Rio とよ

ばれるようになった。Gr. 王は自分の代官にパヴィーアを乗っ取られた時、アヴァーリ族の王に連絡して、その力を利用して代官を倒し、さらにその後一向に退去せぬアヴァーリ族を、多数の兵を率いているよう見せかけて脅し、退去させたとされる (666年)。敵軍についた都市 Foro di Populio や Opiterzio には残酷な報復を行って悪名を残したが、Rotari 王の法典に追加して、決闘を制限する等の配慮も払っている (668年)。道徳的には決して感心できないが、多事多難の時期をよく凌ぎ切ったという点ではすぐれた政治家であった。M. は彼を「万人に恐れられ、身体は強健、戦いにおいて大胆不敵、頭が禿げ、美しい髭を貯え、抜け目なさでは匹敵する者はほとんどいない (671年)」と評するが、まさに獅子と狐を兼ね備えて『君主論』を先取りしたような印象を受ける。同じ671年の項に、この王は鳩を矢で狙い射た時、誤って自分を射て死んだとされ、医師に毒を盛られたという噂があったと記されている。彼の死にふさわしい噂である。なお彼もカトリック教徒であったという。

(13) Bertarido 王 (10)の Bertarido が、Gr. 王の後をついで復権する。Ber. 王はアヴァーリ族の Cacano 王 (611年に侵入した王と同名だが時代が離れ過ぎているので子孫らしい) の許に逃れるが、Gr. 王からの抗議で、アヴァーリ族から追われ、一時 Gr. 王の許に戻る。しかし人気がありすぎ、Gr. 王は暗殺を計る。危険を察知した Ber. は家来の Onolfo に自分の服を着せ、替え玉に仕立てて逃走、フランスへ逃げ込む。Gr. 王は逃走に気付き O. を拷問にかけろが、やがて考え直し、O. ら二人を許す。二人は Ber. 王の許に旅立つ (664年)。フランク王が Ber. 王のために派兵し、その軍が Gr. 王に敗れたことはすでに見た。670年には頼みの Clotario 王が没し、相続問題で混乱し、Dagoberto ら他のフランク王が Gr. と友好関係を結んでいたので、いよいよ身の危険を感じた。Ber. は671年にイギリスに渡ろうと決意する。「彼は船に乗っていて、帆を上げ、船が海上に進み出た途端、ある人が岸から〈そこに乗っているのは Bertarido か〉とたずねた。そこで、〈そうだ〉と答えると、相手は、〈国に戻るように伝えなさい。三日前に Grimoaldo が死んだから〉と言った。直ちに岸に返した B. は、一体このニュースを伝えたのが誰か探させたが、誰もおらず、神の声だと考えた。帰国すると、Gr. 王の子はまだ幼いので、同年 Ber. は王に復帰した。「全員は涙を流し、信じ難いほどの喜び様で元の君主を歓迎した。」「Ber. はこの上なく愛すべき善良な君主だった。善きカトリック教徒で、稀な信仰心に恵まれ、正義を守ることも熱心で、とりわけ貧者への施し手であり、やさしかった。」また、直ちに、亡命の際棄てて行った妻子を、ベネヴェントの田舎からパヴィーアによび戻し、その子 Cuniberto を678年に同僚にしたとされる。それにしても、Gr. 王と Ber. 王とは、何という対照の妙であろうか。ただし、Ber. と C. の親子は善政を布いたにもかかわらず、あるいはむしろそのためかも知れないが、トレント公 Alachi が反乱をおこす。一度はトレント公を包囲したが反撃を受けて、それ以上制裁することをあきらめ、和解する。688年の項に、Ber. 王は P.D. によってこの年に没したとされているが、甚だ疑わしく実際は686年らしいと記されている。続いて「神をおそれること、穏和さと、謙虚さとで良き思い出を残し (中略) その下で人民は羨むべき平安と静かさを楽しんだ」と評価される。

(14) Cuniberto 王 後を継いだ Cu. 王は「善良さと心のやさしさでは、父に劣らぬが、ただあまりにも酒を好んだらしい (688年)」と評される。690年にトレント兼ブレッシャ公 Alachi が再び反乱を起こす。Cu. がパヴィーアを留守にした後、Alachi が王宮を乗取る。しかし A. は聖職者を嫌い、パヴィーア司教の使者をからかい、評判を落とす。ブレッシャ市民 Aldone 親子が、A. をだまし Urba という所へ誘い出し、その隙に Cu. 王が帰国した。Alachi は兵を集めて Cu. を攻める。コモの近くで両軍が出会い、「味方の流血を望まなかった Cu. は A. に一对一の決闘をし込むが A. は同意せぬ。」そこで兵の一人がわけを A. に問うと「たしかに Cu. 王は飲んだくれで愚か者ではあるが、二人が若かったころ、パヴィーアの宮殿の中で、とてつもなく大きな去勢牛を見た時、Cu. はその内の何頭かの背中の中を片手でつかむと、高々と空中に持ち上げたのを見て、とても真似ができないと思ったと打明けた。」そこで両軍は戦うことになるが、Zenone という聖職者が無理に王を説得して王の替え玉となる。A. が Cu. を殺したと信じて兜を取ると別人で、王の軍が崩れそうになった時、王が現われて励まし、Cu. が再び A. に挑戦するが、A. はことわる。その後激戦を経て A. 軍が敗れ、A. は遂に殺された。こうして Cu. は地位を回復した (690年)。P.D. によると Cu. は700年に没したとされ「万人に愛された」とされている。大変やさしく、善良で、戦場では勇敢で、Alachi を倒した所に、聖 Giorgio 修道院を建てた。またこの王は浴場で見初めたローマ人の娘 Teodota に恋した逸話を残している (700年)。

(15) Liutberto 王 Cu. 王の唯一の遺児 L. は父が死んだ時、幼なかつたので、生れが高貴で、この上なき知恵の持主 Ansprando の後見を受けていた。(11)の Godeberto 王の遺児 Ragimberto は、秘かに家来の手で育てられ、Bertarido 王の治下に、トリーノ公に封じられていたが、701年に幼い L. 王に反逆、大軍を擁して迫ったので、L. 王の後見人 Ansprando は、ノヴァーラの近くで迎え討つが、R. 軍が勝ち、Ansprando は L. 王と共に逃亡した。

(16) Ragimberto 王 こうして王となった忘恩の R. はその年 (701年) の終らぬ内に死んで、息子の Ariberto II が王位を継ぎ、亡命中の L. 王と争い続けた。

(17) Ariberto II 王 L. 王は後見人の Ansprando と共に、王位奪回を狙う。702年 Ar. II 軍は、パヴィーア城外で L. 王の軍と合戦、L. 王を生け捕りにしたが、後に浴場で殺した。後見人 Ansprando は逃れた。Ar. II 王は Ans. の家族を虐待した。706年の項で、王を侮辱して罰せられ失脚したフリウーリ公 Corvolo の後任に Penmone が就任したが、その妻は農民の出で、顔が丸々と肥っており、醜いことを自覚して、離婚してほしいと申し出るが、P. は許さなかったと記され、M. はこの当時離婚が多かったことが分るとコメントとしている。なお、二人の間で生れた Ratchis, Ratcait, Astolfo の3人の内の二人が後に王となった。712年バヴァリアに逃れた Ansprando は Baviera 公の軍を借り、Ariberto II に挑戦。バヴァリア人はロンゴバルド人に敗れたにもかかわらず、Ariberto は事態が分らずパヴィーアに引上げた。ロンゴバルド人は王を馬鹿にして、Ansprando に味方した。Ar. は焦り、金を持ってフランスに逃亡したが、Ticino 川を泳ぎ渡る時、金の重さのため溺死した。翌朝遺体が見つかった。治世の当初この王は、篡奪と残酷のために賢者たちの非難を浴びたが、こ

の点を除くと、信仰心篤く、物惜しみせず、正義の愛好者として知られるに至った。彼は夜変装して宮廷を抜け出し、あちこちと歩き回って、土地の者や外国人が町で自分のことをどう話しているか、また領内で判事がどんな裁判をしているかを聞くのだった。それは彼が混乱を正すために少なからず役立った (712年)。」また外国の使節にも質素な服装と飲食物を用いて接し、略奪欲を刺激しないように心がけたという。

(18) Ansprando 王 Ar. II の葬儀が終ると、「ロンゴバルド人は一致して (Liutberto 王の後見人の) Ansprando を自分たちの王に選ぶことを望んだ。彼は人民を良く治めるためのあらゆる資質に恵まれた人物で、特に分別の点では、彼に及ぶ者はほとんどいなかった。だがその治世は余りにも短かく、わずか三ヶ月で、55才の年令で世を去った。ただし死ぬ前に、ロンゴバルド人が息子の Liutprando (中略) を王に選んだということを知る慰めを得た (712年)。」

(19) Liutprando 王 この王は「たしかに若かったが、とても有望視された王子 (712年)」とされている通りの幸運児だが、703年の項で Ansprando の息子として、その一家が凄まじい断崖を受けたことが記されている。「(Ari. II は) Ansprando が捕えられなかったので、怒りをその息子 Sigibrando に向けてぶちまけ、その目をくりぬかせ、またその親戚に当たる者はすべて虐待した。また Ans. の妻 Teoderada を捕えさせ、この女がある時自分は王妃になると口走ったことがあったため、その鼻と耳を切らせ、またその娘 Arona にも同じ侮辱を加えた。だがこの Ans. 一家の悲しい災厄の唯中で、神は、その末息子 Liutprando だけが救われることを望み給うた。彼はまだ本当の若年だったし、Ariberto には気にするまでもない人間のように見えたから、身体に害を加えなかったばかりか、旅立つことを許したので、L. はバヴァリアの父の許に赴いた。それは打ちひしがれた父にとって量り知れない満足だった。」714年の項に、彼の親戚 Rotari が、暗殺計画を企てたので、L. 王は先手を取り R. 親子を殺したとあるように、その治世は必ずしも無事ではなかったけれども、30年余りの間王は安定した手腕を見せ、722年に24条、724年に102条といった具合に法典の整備にも尽力する。727年に聖像禁止問題がイタリアに波及すると、「皇帝領で利益を得るために、この好機を利用して」、総督の支配下にあった都市に侵入したり干渉を加えて法王庁を刺激した。この時期以後の王については、わが国でもいくらかくわしく紹介されているので、そして紙面の都合もあるので簡略に触れるにとどめたい。736年の項に、L. 王が重病にかかり、後任にその甥の Ildebrando が選ばれると、L. が回復したと記され、一時気を悪くした L. も、自制して甥を同僚としたとされる。L. の治世も、末期にはスポレート公の反逆や、法王との不和など問題が多く、リミニの虐殺や教会領内各地での略奪事件など破綻も感じられる。ただし M. は同王のローマの略奪などはなかったと弁護しており、744年の項で、その讃辞が述べられている。「大変な知恵者で、鋭い判断力があり、実に信仰心が篤くて、平和の愛好者だったが、罪人に寛大で、貞潔、廉恥の人、抜け目なき弁士、気前の良い施し手、文字こそ知らなかったが、立派な哲人で、人間の養い手であり、法典の増補者だった。」法王庁にとっては好ましくはないが、積極的な領地の拡大者でもあった。

(20) Ildebrando 王 前王の甥だが、7ヶ月治めただけで、「人民の憎しみを受け (745年)」王位は、

フリウーリ公 Ratchis またはむしろ Rachis に移る。

(21) Rachis 王 すでに706年の項で、その父フリウーリ公 Penmone 夫妻に触れたが、その長子で、744年、「単に勇気だけではなく、他の美しい素質のために」王に選ばれたとされる。就任早々、法王と20年間の和平をむすぶ。だが749年には早くも休戦は終る。R. 王がローマ人の不正に立腹してベルージャを包囲したとされる。Zacheria 法王がなだめに行き、フランク族の Carlomanno の出家の話をしたので、R. 王はそれを真似て、王位を棄て、妻と娘を伴ってローマへ赴き、修道服に着換え、自分はモンテカッシーノに籠ったという。後に世俗的野心が復活した。

(22) Astolfo 王 749年の兄の突然の出家で、末弟 Astolfo が王位をつぐ。この王が行った無謀な活動と754年の Pipino の南下は余りにも有名なので省略するが、756年、「狩で落馬して（ある人は猪と衝突したためという）激しく身体を打ち、三日後に死んだ」という、彼にふさわしい死をとげている。「大胆で乱暴」とされ、ローマ領内から聖遺物をパヴィーアに多数奪って来て、修道院や尼僧院を建てたとされる。野蛮な欲望と信仰心とが奇妙にミックスした人物であった。

(23) Desiderio 王 A. 王が死ぬと、その兄 R. の世俗的野心が復活するが、復位できず、A. 王に子供がなかったので、法王 Stefano II の手紙の援護などもあり、756年にトスカーナの有力者 D. (M. は当時トスカーナ公という地位はなかったとし、ルッカ公とする証拠もなく、むしろ Istria 公とする説もあるとする) が、王位につく。774年、すでに D. 王は Carlomagno の捕虜となった年の項で、M. は D. 王を評し、彼なりの信仰心もあり、修道院も作ったし、法王庁の混乱を解消するための協力もしたが「結局大きすぎる野心と、分別が乏しいために王座から転落して余生を囚われの身で過ごすことになった」と評している。

以上の23代の内 Bertarido は2度数えられているので、22人の王がいたわけだが、その内王子だった者11人、王弟1人、王の甥1人、公あるいはそれに準ずる貴族9人となり、一応選出の際には世襲制が影響していると言えなくもない。しかし実は王子の内、父の没後直ちに王位を継いだ者は9人（Autari は父の死後10年目、Ragimberto は父の暗殺後召使にかくまわれて奇跡的に生きのび、トリノ公となった後に王となる）で、その内4人（Rodoaldo, Godeberto, Liutberto, Ariberto II）は就位後間もなく（Ar. のみは10年余り後）、失脚または暗殺され（前の3人は殺され、Ar. II は逃走中溺死）、1人は後見人の母を失った後に発狂して失脚（Adaloaldo）、他の1人は王妃に暗殺され（Alboino）、一応天寿を全うしたのは3人（Bertarido, Cuniberto, Liutprando）で、しかも前の2人は反逆者によって王位を追われ辛苦の後に復位している。四代に亘って王の血が続いた例は2件（Ariberto I — Bertarido — Cuniberto — Liutberto, Ariberto I — Godeberto — Ragimberto — Ariberto II）あるが、いずれも中断された偶然に近いつながり方で、L. 王はなきに等しい。つまり選出に当っては効力を発する世襲制が、王位の維持に当たってはほとんど効力を発揮しえない。9人の公や貴族の内、選挙または大勢に推されたらしい者が6人（Clefo, Arioaldo, Ariberto I, Ansprando, Rachis, Desiderio）、前王妃に選ばれて結婚した者が2人（Agilolfo, Rotari）、王を倒して代った者が2人（Grimoaldo, Ragimberto）いて、前王妃に選ばれた2人が最も高く評価され治

績を挙げている。この前王妃が王の選出権を一手に握るという方法は、後半には見られなくなるが、この民族の古い制度や宗教と関係があるのかも知れない。なお選挙された6人中 Clefo はすぐ暗殺され、Ansprando も間もなく病死、Rachis は出家した。22人中で殺害されたといわれるもの5人 (Alboino, Clefo, Rodoaldo, Godeberto, Liutberto, さらに噂では Autari, Grimoaldo に毒殺説あり, Adaloaldo の狂気も葉のせいという説がある) 事故死3人 (Grimoaldo, Ariberto II, Astolfo) という数は、王位の不安定さを物語っている。

M. が描いたロンゴバルド族の王たちの生涯を見る時、最も印象深いのは何といてもその運命の激変ぶりであろう。明から暗への変化は、王子たちの運命ですで見だが、暗から明への変化もそれに劣らず激烈である。Bertarido は他郷を逃げ回り、「神の声」で帰国して復位し、Grimoaldo は幼時にアヴァーリ族の奴隷になりかけ、その後も父の所領は回復できず、他郷で苦難の末に王位につく。Cuniberto は、幼時に父に置き去りにされて母と共にベネヴェントに捕われの身となるが、約10年後突然父が王位に戻って運命は好転する。だが彼は王となった後も、一時反逆者によって都を追われ、ようやく地位を取り戻す。Ragimberto は、召使に匿われて辛うじて生き延び、王位を回復した伯父によってトリノ公の地位を与えられ、さらに王位を奪う。Ansprando は幼い王を連れて都から逃れ、その王の死後も他国を放浪する。その子 Liutprando は、王の一家に対する迫害を幼時に目のあたりにし、また国外に逃れて父と同行する。だが Ariberto II の軽率によって、この親子の運命は一変する。殺害された父を持つ王が、Autari, Ariberto I, Grimoaldo, Ragimberto, さらに一説では Arioaldo と4~5人に達していることから、明暗の激しさが分るだろう。いわばロンゴバルド族の王権は、特に後半には、敗者復活戦の勝者たちによって獲得されていたといえるだろう。こうした運命の試練を、Agilolfo における雷の予言、Bertarido が聞いた「神の声」、Cuniberto の怪力、Ansprando の妻が口にした自慢 (予言)、そして二人の前王妃が行った選出などと併せて考えると、要するにそこには、人生そのものを一種の神明裁判とする考え方がうかがえそうであり、祖先が一時期アヴァーリ族の奴隷だった P.D. のみならず、M. 自身にもそれに共感する姿勢がうかがえるように思われる。

ところでこれらロンゴバルド族の統治一般に対する M. の評価は、決して低いものではなかった。たしかに M. は侵入時における彼らの蛮行を嘆き、彼らが侵入したとされる568年を「イタリアが体験したもっとも忌むべき年の一つ」と呼び、また578年の項で聖Gregorio 大法王の「都市は人けがなく…」で始まる名高い文書をも引用している。しかし M. にいわせると、それは一種の戦争状態に生じた非常事態に過ぎなかったのだ。すなわち M. は、584年の項で、P.D. の「ロンゴバルド族は独特の規律を守った (中略)。自分の領内では驚くべき規律正しさで、暴力沙汰を起さず、他人に危害を加えず、不当に虐待したり仲間の物を奪ったりもしない。泥棒も人殺しもしない」という証言に基づき、G. 大法王らによって非難されているのは、戦争状態や領外におけるいわば外での彼らの行動であって、内ではずっと秩序正しい統治を行っていたと弁護しているのである。むしろ当時戦乱が絶えなかった東ローマ帝国や、重税に悩まされたイタリアの総督領よりも、ロンゴバルド族

の統治下の方がはるかに平和で幸福だったと主張する(616年)。652年の項でギリシャ総督の不当な活動に触れた際には「ある著者たちからかくも粗野だと非難されたロンゴバルド人が、ギリシャ人よりも良い主人となり、より思慮深い王となったことが理解されるよう」という明言も記され、彼らが主に教会関係者が宣伝しようとしたような野蛮な統治者ではなかったことを、M. はほぼ一貫して力説しているといえる。なおこの民族が教会から敵視された理由の一つであるアリウス派の信仰にしても、それもやはりキリスト教の信仰であり、彼らがキリスト教徒だったことに変わりなく、しかもその信仰を押しつけたり、カトリック信仰を妨害したわけではなかったと弁護(579年)している。M. のロンゴバルド族の弁護には、彼一流の博識を恃んだ強引さを感じられなくもないが、教会が最も安易に悪宣伝を流した相手であるだけに、こうした弁護は正しい点を多く含み、また法王権を歴史的に限定していくためにも不可欠な作業であった。(終)

注

- ① L.A. Muratori, *Opere*, Milano-Napoli 1964, Tomo II の pp. 1145—79. a. 回教徒の侵出と Eraclio 帝の罪, b. 東ローマの野蛮とロンゴバルドの文明, c. Bertarido 王と Grimoaldo 王, d. Bertarido 王治下のイタリアの幸福, e. Alachi 公の Cuniberto 王への反逆, f. ラヴェンナの修道院長聖 Giovanni, g. Baroni が伝える Liutprando 王のローマ攻撃は真実か, h. Liutprando 王と法王 Zaccaria, i. 法王 Stefano II のフランス訪問, j. Pipino 王と法王 Stefano II の協議, k. Pipino 王の第二次イタリア遠征, l. フランク王らのロンゴバルド族との結婚, m. Carlo 王, Carlomanno の所領を奪う, n. ロンゴバルド王国の滅亡, o. ロンゴバルド王国が早く滅亡した理由の15箇所。
- ② S. Bertelli, *Erudizione e Storia in Lodovico Antonio Muratori*, Napoli 1960, Cap. VI, p. 450. なおそのコメントは主に, pp. 431—6。
- ③ たとえば G. Pepe, *Il Medio Evo Barbarico d'Italia*, Torino 1965 では約20ヶ所(本文中9ヶ所)引用されている。
- ④ 森田鉄郎他著, *イタリア史*, 東京 1976, 付録 pp. 52—3。
- ⑤ Paolo Diacono については後に本文中で触れるが、ロンゴバルド族に関するほとんど唯一の同族出身の歴史家で、M. は主として彼に依存してこの部分を著したといえる。
- ⑥ 森田鉄郎, *ロンゴバルディ 侵住建国をめぐる諸問題——イタリア民族形成史の一こま——『城西人文研究』第12号所収*, 1985年。
- ⑦ S. Bertelli, *op. cit.*, p. 422.
- ⑧ 本論では *Opere del Muratori*, Venezia 1970年版所収の *Annali d'Italia*, Voll. VIII-X (Tomo XXIII-V) を利用した。
- ⑨ コマッキ論争とは、M. が1708年以降エステ家の立場を代表して、法王庁側に立つ G. Fontanini らを相手に行った、コマッキオ市の領有権をめぐる論争で、1720年まで延々と続けられた。
- ⑩ 本学『学報』71-3号大阪 1986年所収の本ノート——その2——、ノート3、の中で、ゴート、ロンゴバルディ同族論の紹介をした。
- ⑪ M. は古代の著者としては、Tacito の他 Vallesjo, Patercolo, Strabone, Svetonio, 侵入時代の著者としては Procopio, Agatia を挙げる (Vol. VIII, p. 250)。
- ⑫ 同族侵入時代の王 Alboino の父で551年ジェピディ族を破った王も Arduino とよばれ、また539年に Vaci または Vaccone がいて次に Valtari が継ぎ、その後 Auduino (= Arduino) が継いだとされているので、この Arduino は別人もしくは誤りであるようだ (Vol. VIII, pp. 37—8)。

なお紙面の都合により引用箇所はすべて、注⑧の出典に収録された年数の表示にとどめる。